



YES/NO枕

を置いたら

お前の息子の

暴走が

止まらない

大学の友人のタケトは、よく俺んちに宿泊。

勉強に研究に忙しく、気がつけば終電を逃しているのだとか。

で、夜中、大学近くに住む俺のアパートに「一泊の慈悲を！」と泣きつくのだが、べつに不平はない。

宿泊代として朝飯を用意してくれたり、学食を奢ってくれるし。

ただ、タケトは勉強、俺はバイトに忙殺され、すれちがいになるのが寂しい。

入学したころは、馬鹿騒ぎばかりしていたのが。

そのことを友人に愚痴ったら「俺にいい案がある」と枕をとりだした。表の面に「YES」裏の面に「NO」と書かれたのだ。

「これをタケトが寝るところに置いておけ。

そしたら、どれだけ疲れていても『なんじゃこりや！』ってツツコむだろうし、二人して笑えるだろうよ」

お互い気をつかい、なんとなく羽目を外せなかったに、この枕がいいきっかけになるかも。

胸を弾ませて、早速その夜、枕を置いたところ。

あいにくタケトはなかなか訪れず。

あきらめて熟睡したら、にわかには腹に衝撃を受けて目を見開いた。

俺に馬乗りになるタケトを認識する間もなく、突きつけられる枕の「YES」。

すぐに枕を放って「俺の思いに気づいていたのか」と股間に固いのを押しつけてくる。

なんと、俺に好意があったらしいタケトは真に受けたらしい。

慌てて「いや、その・・・！」と否定しようとするも情熱的な口づけで塞がれ、下半身を立派な息子で擦られて。

日々バイト三昧だし、タケトがよく泊まりにくるから、彼女がいないどろか、ろくに自慰もしていない。

かなりのご無沙汰とあり、またタケトの獣のような欲情ぶりに当てられて、快感に酔いしれ「ふう、ううん、んんん！」と早々に射精。

余韻に浸ってぼうつとすると、濡れたズボンと下着を脱がして尻の奥に指をインするタケト。

「それはいかん！」と止めようとすれば「俺はお前が好きだ」と真顔で告白。

「お前も俺が好きなんだろ？」

熱っぽく濡れた瞳でまっすぐ見つめられて、鼓動が乱れてやまず。ふと例の枕が思い浮かび、目を伏せつつ「イエス・・・」と呟く。

返事を聞くや否や、さらに勢いづいて愛撫を畳みかけ、拡張に専念して「くうああ！そこ、だめ、だめってええ！」とまた射精させて。

いよいよご自慢の息子を押しつけたなら「好きだ・・・シンジ」とあらためて思いを吐露。

その言葉に涎を垂らしたほど陶醉したし、突かれるたびに「シンジ！好きだ！シンジ・・・！」と恋焦がれるように呼ばれてはたまらず。

「やああ、好き、いわれるの、よすぎ、よすぎで、こわああ！も、もお、分かったからあ、好き、いわれるとお、俺え・・・！」

限界を突破するような快感が突きあげて「あふううう！」と空イキ。バイト疲れの上での激しい運動に目が回ったものを「まだだ！」と元氣満点のタケトの息子は暴れまくり。

「俺のお前への思いはこんなもんじゃ！どれだけ好きか、思い知ってくれ！」

そのあとずっと腰を強打され、体内に射精されつづけ、朝日がのぼるころ「もお、らめええ！」と潮を吹いたことで、やつと終了。

冗談のつもりが、タケトを本気にさせた枕はなんとも忌まわしいもの。「お前のせいで」と恨みながら、今も捨てられずにいる。